

第二十二回香川菊池寛賞受賞作品

寒の紅

帰来 富士子

千枝が、姑、露の異様さにはじめて気づいたのは、庭の沈丁花の香りがひとしお濃くなった朝であった。

二人暮らしの朝食の時間は、いつもきまつている。それを知らぬはずの露が、その朝はどうしたとか、いつまで待っても茶の間に姿を見せなかった。

千枝は露の部屋の前まで行き襖越しに声をかけてみた。

「おばあちゃん。」

部屋の中からは、何の返事もなかった。

「おばあちゃん、ごはんですよ。」

もう一度呼びかけながら、千枝は急に語尾が震えるのを覚えた。

襖の向うでただならぬことが起こっている。そんな気がした。

姑の露は、八十五歳の高齢なのである。

「開けますよ。」

千枝は返事を待たずに襖を引いた。

レースのカーテンを閉じた正面の窓から、透明な朝の日ざしが透け、六畳の和室にほの白い明るさをたたえていた。

窓のすぐ手前に露がいた。背中を丸めて向こうむきに露はちんまりと坐っている。

張りつめた気持ち急速にゆるんだ。

「おばあちゃん、いるじゃないの…」

軽い怨みをこめて千枝はその後姿に声をかけた。

だが、露はふり向こうとしなかった。

銀ねずみ色のウールの普段着に紺のすかし編のちゃんちゃんこを羽織った露は、上体を少しかがめ、何かをしきりにやっている風であった。後で小さくまとめた白髪のおくれ毛が、かすかに揺れていた。

襖が開けられたことにも、呼ばれたことにも

全く気づく風のない露の背に、千枝は新たな不安をかきたてられた。年に似合わず耳のさとい露が、聞こえないはずはなかった。何かに心を奪われているに違いないのだ。

千枝は凝然と襖ぎわに立ちつくした。露の前へまわって事実を知ることがはたやすい。だが、そうすることにはなぜかためらいがあった。

この家へ嫁いだから、三十三年間、露と一緒に暮らしてきた千枝だが、姑に対してこのような得体の知れぬ思いを抱いたのは始めてであった。

「おばあちゃん、何をしとるの…」

千枝は、わが逡巡に抗いながら、つとめて明るい声をつくり、部屋に踏み入った。

露のうしろに立った。露の左手に持ったものが、きらりと光って千枝の眼を射た。

それは小さな手鏡で、露の右手は顔の前面にあつた。

「おばあちゃん！」

切迫した声が千枝の口からほとばしり出た。急いで前へまわった。

気配にやっと気がついたのか、露はゆつくりと顔を上げた。

千枝は、思わず息を呑んだ。

何ということだろう。皺に埋もれた露の小さな

鏡台の引出しにしまっておいたはずの化粧品を、露がいつ取り出したのか、千枝は気がつかなくかつた。

驚愕が去らぬうちに、疑問が押し寄せ、続いて不安が、千枝の全身を押し包んだ。

露の化粧した顔を千枝はこれまで一度も見ることがなかったのだ。

化粧を施された八十五歳の老女の顔には、レースカーテンの柄が薄く影を置き、墨色のくまどりを作っていた。

顔中に大きく刻まれた皺。肉がそげて垂れた頬。眼窩の中へ落ちくぼみ、ひっそりとまたたいている瞳。太い鼻梁や、高い額は若い頃のまま

唇が真紅の口紅で鮮やかに彩られていたのだ。唇だけではなかった。顔全体にうつすらと粉化粧が施され、頬にはほんのりと刷毛で刷いた頬紅のあとさえ見えた。

「おばあちゃん、どうしたん！ いったいどうしたん！ しつかりして…」

ぺたりと坐わりこんだ千枝は、露の膝を両手で掴んでゆずぶった。膝の上から口紅やコンパクトやパフがころころとこころがって、畳の上に散らばった。

八十五歳の露が、手鏡に顔をうつして一心に化粧をしていたのである。

化粧品は全部千枝のものであった。

であったが、それらは、小ぶりの露の顔には、むしろ不釣合な印象を与えるものであった。その見なれた顔を、今は紅おしろいが別人のように作り替えていた。

しつかり者といわれた露のおもかげは、どこを探しても見当らなかつた。

千枝に正面から見つめられた露は、気恥かしそうな笑みを浮かべた。唇がほころんで、口紅が妖しく光った。

千枝は、あつと思つた。露の笑顔から、不意に奇妙な色香が立ちのぼつたのである。

時間がたつて化粧品が肌になじんできたのか、

露の顔には艶が浮き出していた。失せてしまったいたはずの女の匂いが、老女の笑顔からふわっと漂ったことに千枝はどぎまぎした。

見てはならないものを、見てしまったような動揺が、千枝を捉えた。

露の内部に何か異変が起こっていることだけは確かであった。

けれども、いったい、何が……。千枝は混乱した。

つと、立ち上がると、手荒くカーテンをあけ、ガラス戸をいっばいに開いた。

沈丁花の香りが室内に流れこみ、泰山木の梢を何の鳥か、チ、チ、チ、と啼いて飛び去った。

だが、こともあるように、夫の留守中、姑に異変が起こってしまったのである。いったいどう対処すればよいのか、千枝には今、全く方策がたたなかつた。

ふと振り向くと、露もすわったまま窓の外に広がる春の空を見上げていた。感情を失ったような露の顔に、ただ紅を塗った唇だけが濡れ濡れと光っていた。

「変なことをいうから、お母さん……。どうしたのかと心配したわ。おばあちゃんがお化粧なんて……。まさか……」

茶の間にはいつて春のコートを脱ぎながら、

香東川の西べりのこのあたりは、町中よりもやはり空気が澄んでいる。今日は殊に空が青かった。空を仰いで、千枝の思いは、フランスにいる、夫、圭吾に走った。

(あなた、どうしよう……)

縫って訴えたい思いが、胸にこみ上げてきた。去年の十一月から一年間の予定でパリ生活を送っている圭吾であった。友人であるフランス人のうちに寄宿して、好きなフランス文学の研究に充実した日々を過ごしているはずだった。長年勤めた県庁を退官して始めて自由な日々を得た圭吾にとっては、かねてからの念願の日々の実現なのであった。

杏子は、半分怒ったような口ぶりであった。思いあまつた千枝が、岡山へ嫁いでいる娘の杏子に電話を入れたのは、昨夜遅くである。「その、まさか、なのよ。おばあちゃんを、あなたの眼で見るとええ。母さん、もう何だかわからんようになった……」

千枝は、投げ出すようにいうと、大きな息を吐いた。杏子の顔を見て、昨日からの緊張が急にゆるむのを覚えていた。

露は、あれからずっと自室に閉じこもったきりである。

食事は誘うとちやんと茶の間まで出てきたし、トイレもいつもと同じように支障がなかった。

ただ、言葉数が極端に少なくなった。必要なこと以外は、殆ど口を開こうとしなかった。

そして、もつとも大きな変化は、やはり、化粧であった。

今朝も、露は長い間手鏡をかざっていた。

千枝は昨夜、露の使った化粧品全部を、自分の

鏡台ではなく、洗面所の小引出しにしまつてか

ら床についた。

その時、露は寝入っていたのだから知るはずは

なかった。だが、今朝、千枝が目ざめて部屋をの

ぞくと、露はもうちゃんと鏡に向かっていたの

である。

昨日と寸分違わない恰好で窓辺に坐り、コンパ

クトや口紅を膝の上に広げて鏡をのぞいている露を見た時、千枝は、何がなしに戦慄が走るのを覚えた。

毎朝五時には目ざめる露である。千枝が覚めな

いように音をひそめて、化粧品を探しまわつたの

に違いない。

春暁の薄闇が、家の内のそこそこに、まだ残

っている時刻。戸棚や引出しを開けてまわり、

化粧品を探す白髪の老婆の姿を想像すると、

千枝はひそやかな鬼気をさえ感じずにはいられな

かった。

突然、露の部屋から何やら杏子のかん高い声が

聞こえた。

そして、

「杏子、何するん。苦しいからやめておくれ、や

めて…」

露のくぐもつたような声が続いた。

千枝は廊下を急いだ。

部屋の中では、杏子が祖母の口紅をハンカチで

拭き取ろうとしていた。

若い杏子に抱きすくめられて、露は喘いでいた。

喘ぎながらもそうさせまいと抵抗する露に、二人

は激しくもみ合う形となっていた。

「やめなさい。杏子。やめなさいったら…」

千枝の声に杏子は動きを静めた。ハンカチを持

つたままの杏子は荒い息をつきながら、露をにら

みつけた。

(以上1月13日放送分)